



夏を制する者は受験を制す②

別紙に、他進学校の生徒の実物の夏休み計画表の例を添付します。

参考にしてください。

■ 総合型選抜とは？ ～大学入試で求められるものを意識した学習を！～

現在の大学入試は、筆記試験の正答力だけでなく、より多様な能力を問う内容へ変化しています。例えば、最近増えている「総合型選抜」では、多くの大学がディスカッションやプレゼンテーションを課しています。

例えば、ある国立大学の総合型選抜においては、

「評価の対象」を「なにを行ってきたか」という過程・「なにを身に付けたか」というアウトカム・「なにをしたいか」という企画力の3点に挙げ、

第1段階選抜：聴き取り、読み取り、書き出す力・講義を受講後、キーワードの概説とレポート

- ・大学の講義への興味・関心
- ・難易度の高い内容を捉えようとする意思、知識、理解力、思考力
- ・課題解決型記述問題（高校前半の学習内容までの利用）（高度な記述問題）
- ・思考力／判断力／表現力／企画力

第2段階選抜：対話する力、協働する力・適性検査（数・理・英）：高校前半までの学習内容

- ・学びの計画書作成、グループワーク
 - ・個人面接
- としたり、

また、ある国立大学では、

「900（共通テスト）＋600（以下の内容）」とし、

- ・課題解決型記述問題（150）
- ・知識・技能の活用を通じた論理的思考・表現力
- ・理科・数学・算数等を題材に結果、考察、発展を目指した論文の作成
- ・グループワーク（250）
- ・協働的活動、多様な学びへの享受
- ・5名程度のグループでディスカッション・プレゼンテーション、自己評価
- ・個人面接（200）主体的で深い学びへの聴く、話す <10分程度>
- ・共通テスト（900）

とするなど、一筋縄ではいかない対策が求められます。

合格するためには、これまでのような国語や数学といった教科の学力で測られる入試の点数だけでなく、議論や発表のスキルを身につける必要があります。そして、発表できる中身があること、

つまり、前提となる自分なりの考えをしっかりと持つことや、それを裏付けるような高校生活の様々な経験や努力も必要です。この傾向は今後も加速していくことが確実です。

そうした流れを受けて、高校の教育も変わりつつあり、高校の3年間でどのような経験をして、どのように学んだのかというプロセスを重視するようになりました。これからの大学入試に対応する力は、短期間の詰め込み型学習では身につけません。1、2年生のうちから少しずつ蓄積していくしかなく、実質的には大学入試対策の前倒し傾向が高まっているとも言えます。

ただし、従来型の受験勉強を早くから始めないと間に合わない、という意味ではありません。

なぜ、大学が入試のやり方を変えてきているのか。それは、大学が求める人材が変わってきており、その理由は大学の先にある社会が求める人材が変わってきているからです。

世界がより複雑な構造になり、これまで以上に正解がわからない、あっても一つではない社会を生き抜く人材を、従来の出題方法ではもはや判別できなくなりました。

今の大学入試は、「高校生活、あるいはそれ以前の経験の中で、社会が求める力を少しずつ身につけていきましょう、それを大学入試で見ますよ。」という意味なのです。

では、これからの社会で必要な力とは何でしょうか。いろいろありますが、あえて一つ挙げるとすれば、「言葉にする力」だと思います。

これまでの「当たり前」が「当たり前」ではなくなる社会になっていき、模範とする生き方も定かではない中で、子ども自身が「これはどうなんだろう」と立ち止まり、その疑問や自分なりの考えを文字や言葉にして、他者に見える形で言葉にすることです。

自分の思いや考えを言葉にしないままだと、何か不都合なことが起きてもごまかしが効きますが、言葉にすることで、自分で言ったことは責任を取ろうと、具体的なアクションを起こすようになります。

また、自分の考えの中身を客観的に見つめられますし、周囲の理解や協力も、言葉にすることで初めて得ることができます。

さらに、日々の学習に関しては、本質的な理解をしながら、自分の頭で考えながら勉強することです。圧倒的な知識量が必要な英語や古文の単語や文法などは、ひたすら暗記したり覚えるしかないものがあります。基礎をなす部分であることが多いので、できる限り早めに取りかかりインプットを終わらせましょう。しかし、数学や理科であれば公式の丸暗記や解法のパターンを覚えるだけではだめで、仕組みを理解する必要があります。日本史や世界史であれば歴史の流れに沿って因果関係や地理的な背景を考えなければなりません。英文や現代文などは多くの文を読んだり、新聞などからの知識がより深い理解につながります。それが思考力を高めます。

どうか、勉強時間を増やすだけでなく質の向上にも取り組んでください。

■ 志望校を下げることの弊害

国公立は基本的に共通テストで5教科が課されますが、2年生までに英数国の3教科の学習の見直しをつけ、そこから理社の学習を載せていけた生徒や、特に文系で数学をあきらめない生徒は好結果につながりやすいようです。また、授業での指導や進路指導を素直に受け止めて、頑張る生徒が多かったことも好結果に繋がります。共通テストの平均点が大きく下がったことで、弱気になって国公立大学をあきらめる傾向も全国的にはありますが、全体が下がって弱気になっている時こそ志望を下げずに出願しようという生徒も、好結果につながります。

まず、志望校を下げたくなるのは、あなただけではありません。そして、「下げた」志望先もだいたい一緒であることも頭に入れなければなりません。つまり、自分が有利になりそうな行動を皆がとってしまうと、むしろ不利な状況を作ってしまうということなのです。いわゆる「囚人のジレンマ」というやつです。

ですから、下げたところで保証がないならば、信じた道を全うするのが、精神論ではなく、戦略的に有利だと言えます。下げてしまえば、「下げたのにA判定が出ない!ここも落ちるかも…」という「新たな不安」があなたを襲います。不安から逃れる最善の方法は、「不安から逃げないこと」です。不安の原因を具体化して一つずつクリアして行きましょう。

■D、E判定でも諦めず最難関大に合格した例

自己採点後の判定Dから国公立大に合格した生徒がいました。夏から秋にかけての模試判定はD、Eばかり。それでも、「毎日」放課後自習室で勉強し、土曜日も学校に来て、8時から16時までたゆまず学習に励みました。近づきたいほどの集中力と志望校への情熱。この姿にずっと接してきて、私は一次試験後のD判定などひっくり返すと、信じて疑いませんでした。志望校判定会議でも全先生が後押ししてくれました。人の心を動かすほどの努力、これが逆転を呼びました。

今年度も共通テストの難易度がどうなるかは予断を許しません（制度設計の段階で示された平均点5割よりもまだ高い教科もあります）。ただ、難易度がどう変化しても、条件は受験生全員が同じです。国公立の2次試験に必要な学力は変わりません。学力は、学習した時間と内容に比例して必ず伸びます。難関大を志望している人は特に、早期からの学習の積み重ねを心がけてください。

【偏差値帯別の大学群合格率 ～河合模試調べ～】

	早慶上理	GMARCH	成成明学獨國武	日東駒専
65以上	58%	75%	86%	86%
60～65未満	28%	57%	79%	85%
55～60未満	13%	33%	60%	74%
50～55未満	6%	14%	36%	56%
45～50未満	3%	5%	18%	38%
45未満	4%	2%	7%	22%

・成成明学獨國武＝成城・成蹊・明治学院・獨協・國學院・武蔵

・追加合格者を多く出す大学：慶応、上智、成蹊、法政、立教

・正規合格者を多く出す大学：駒沢、早稲田

【国公立大学入試トピック】

(1) 志願者減少大学

山口（工）	前	-784
岐阜（医）	後	-715
山口（工）	後	-667
高崎経済（地域政策）	後	-598
下関市立（経済Z）	中	-491
三重（教育）	前	-489
島根（法文）	後	-459
下関市立（経済）	前	-425
富山（工）	後	-422
高崎経済（地域政策）	前	-411
千葉（法政経）	後	-408
県立広島（地域創生）	後	-382
富山（医）	後	-371
静岡県立（薬）	中	-366
兵庫県立（工）	後	-363

(2) 募集人員に帯する合格者が多い大学（前期）

釧路公立	6.9倍
都留文科	2.4倍
長野	2.1倍
山口東京理科	2.1倍
公立鳥取環境	2.0倍
北見工業	1.9倍
尾道市立	1.6倍
下関市立	1.6倍
群馬県立女子	1.6倍
福知山公立	1.5倍

【私立大入試トピック】

＜東京理科大の再編と入学定員の変更＞

- ・ 先進工学部 360 → 575名 (+215名)
- ・ 創域理工（旧 理工）学部 1240 → 1160名 (-80名)
- ・ 理学部 720 → 585名 (-135名)

理工学部から創域理工学部へ 共に響き合う10学科

現在		2023年度	
数学科	先端化学科	数理科学科	先端化学科
物理学科	電気電子情報工学科	先端物理学科	電気電子情報工学科
情報科学科	経営工学科	情報計算科学科	経営システム工学科
応用生物科学科	機械工学科	生命生物科学科	機械航空宇宙工学科
建築学科	土木工学科	建築学科	社会基盤工学科